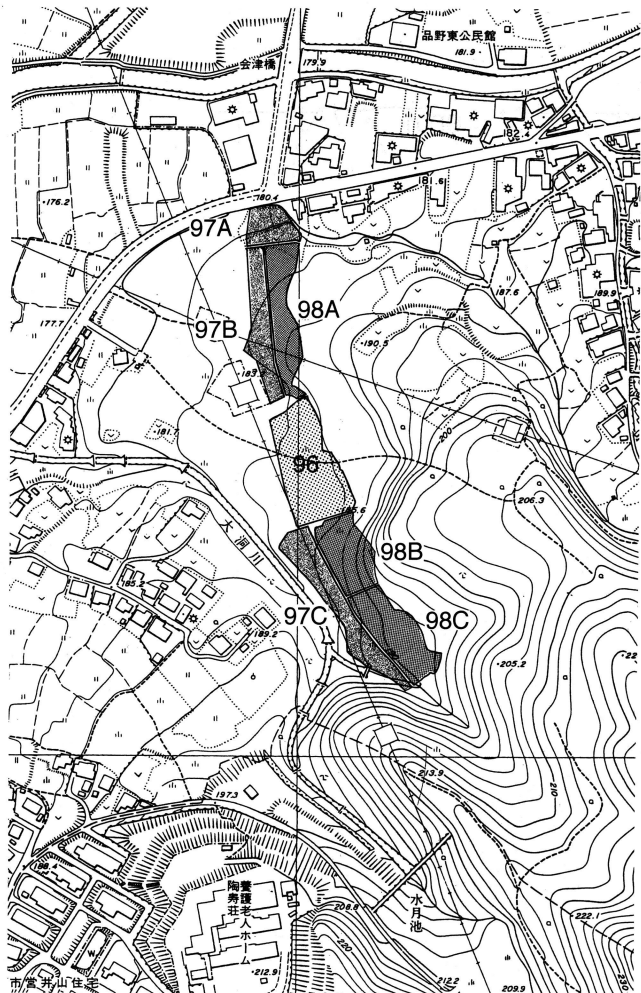


かみしなの
上品野遺跡

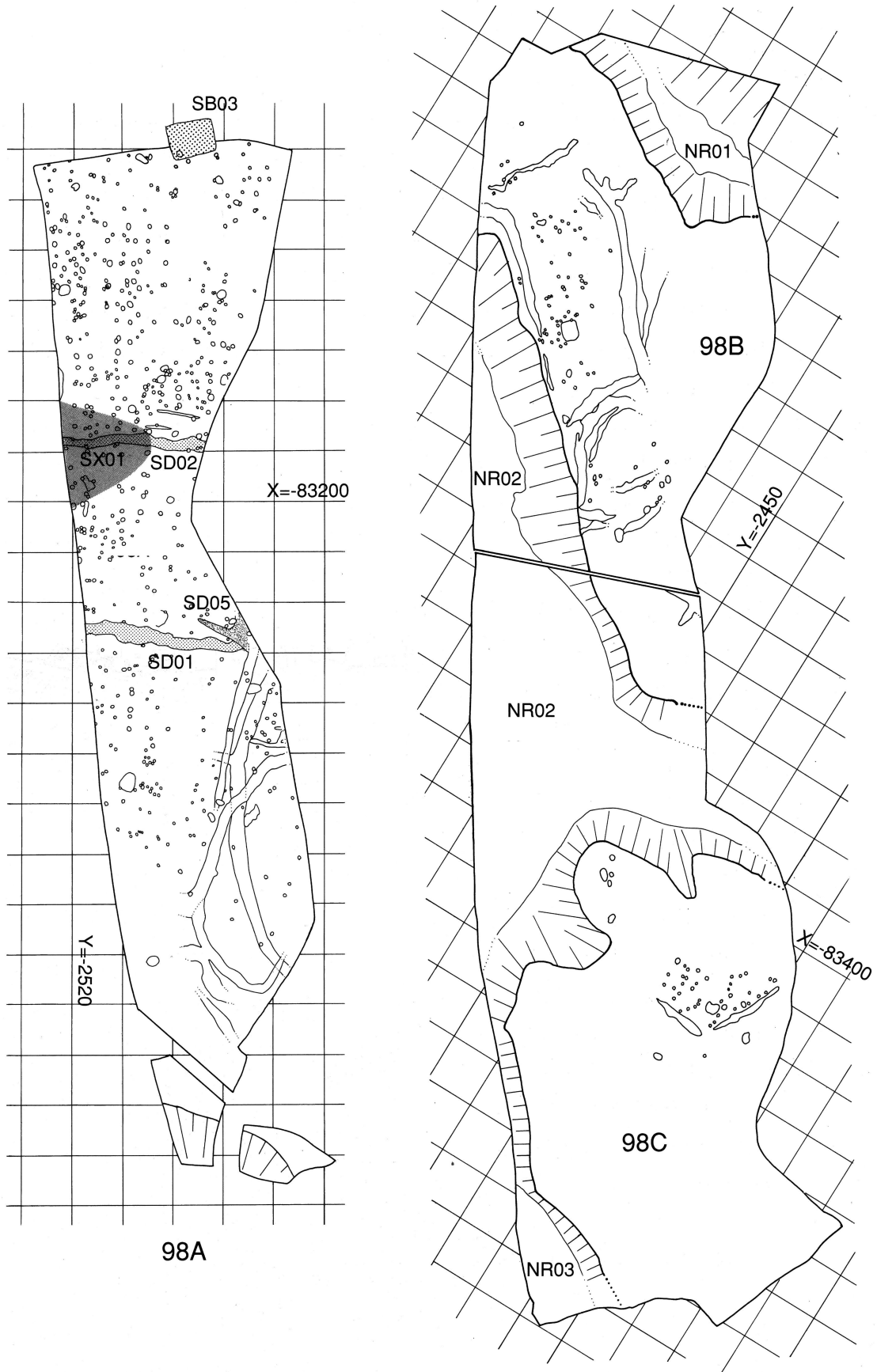
調査の経過 上品野遺跡は、瀬戸市の北東部に位置する品野盆地を北西に望む丘陵斜面から標高180m程の段丘端部に立地する。発掘調査は、東海環状自動車道建設に伴う事前調査として平成8年度より実施し本年度の調査ではほぼ終了した。平成8年度の調査では縄文時代後・晩期かと考えられる「ドングリピット」が4基、平成9年度の調査では後期旧石器時代初頭の台形様石器を含む石器集中地点と弥生時代末から古墳時代初頭の住居4棟、奈良時代から平安時代にかけての住居1棟等が検出された。本年度の調査は、建設省より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、6,600㎡をA～Cの3調査区に分けて、平成10年4月より平成11年1月にかけて実施した

A区の概要 A区は北側を97A区、西側を97B区、南側を96年度調査区にそれぞれ接し、調査区内は段丘端部の斜面の部分とやや平坦な部分とにわかれ、遺構はやや平坦な部分に多い。検出した遺構は、住居、土坑、溝、柱穴等である。主な遺構として後期旧石器時代の石器と剥片が出土したS X 01、弥生時代末から古墳時代初頭の住居（S B 03）1棟、平安時代の溝2条（S D 01・02）、鎌倉時代の溝1条（S D 05）等を検出した。

後期旧石器時代の石器と剥片が出土したS X 01は97B区S X 01の東側になり、石器集中地点の東端を確認できた。埋土は褐色粘質土、明黄褐色土で下層の明黄褐色土層よりナイフ形石器1点、石刃1点、剥片30点程の遺物が出土した。ナイフ形石器は、先端部が欠損しており、現存長2 cm 1 mm、幅7 mm、厚さ3 mm、重さ1.1 gを測り両側面にはリタッチが見られ、裏面はバルブ部分を調整し基部としている。石刃は、長さ5 cm 6 mm、幅2 cm 1 mm、厚さ8 mm、重さ8.5 gを測る。縦方向に剥離された剥片を利用し、側面にはリタッチが認められ



第1図 調査区位置図 (1:5,000)



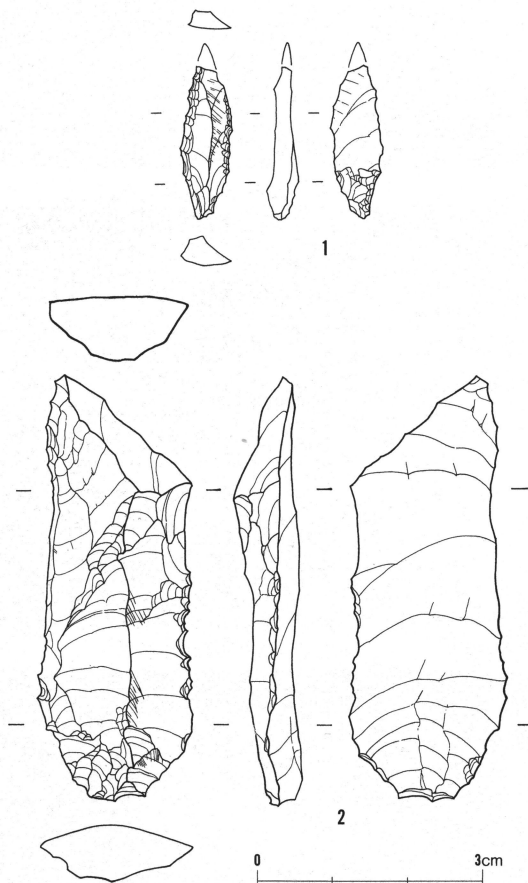
第2図 98A・B・C区遺構図(1:600)

る。97B区と今回の98A区の調査結果から、SX01は現地表下1m20cmから1m50cm、南北幅5m、東西15mを測り、西側に傾斜した浅い凹地状を呈しており、西側については調査区外のため範囲を確認することができなかったが遺物の出土状況から西側へ広がっていくものと思われる。

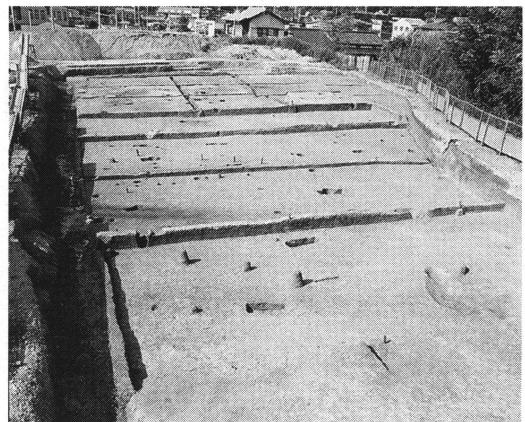
弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴住居SB03は97A区の調査時に全体の2/3が調査され、今回の調査で完掘となり南西隅のピットより台付甕の脚部が出土した。

平安時代の溝SD01・02は調査区のほぼ中央を東西方向に平行に掘削されておりSD01は97B区のSD01の東部分で溝の埋土は暗褐色土で、折戸53号窯式の時期と思われる椀、皿や^{みいご}鞆の羽口、砥石などが出土した。SD02は調査区北側の溝で、97B区の調査では開墾による削平によって検出できなかった溝で、暗褐色土の埋土で、折戸53号窯式の椀、皿の他、緑釉椀等も出土した。

平安時代末から鎌倉時代の遺構として、斜面から平坦面にかけて、北西方向のSD05がSD01を切って検出された。SD05からは椀・皿・陶丸等が出土している。なお斜面縁辺の三条の溝は、最近まで耕作されていた水田に伴う溝である。



第3図 98A区SX01出土遺物実測図(1:1)
1. ナイフ型石器 2. 石刃



A区SX01全景(南より)



A区SX01完掘状況(北より)



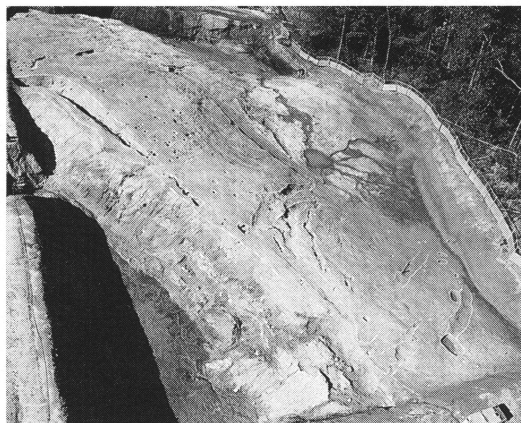
A区南側全景



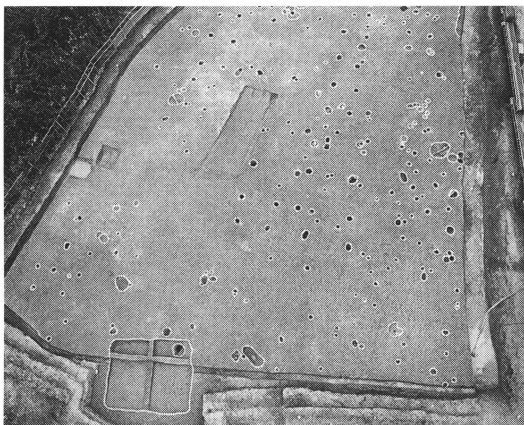
B区全景 (北より)



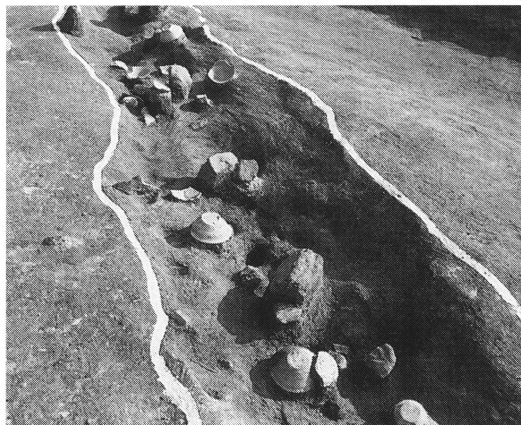
A区中央部全景



B区全景 (南より)



A区北側全景



B区S D01遺物出土状況



C区全景 (北より)



C区南側全景

B区の概要 B区は西側を97C区に接し、96年度調査区の南側に位置する。丘陵斜面の一部、馬の背状になった部分を挟んで北側と南側の谷にわかれる。溝、柱穴などの遺構は馬の背状になった部分のやや平らな場所に多い。

N R01（北側谷）は96年度調査時にドングリピットを検出した谷と同一の谷で98B区は対面側となる。全長約20m、最大幅約15m、深さ約3m50cmを測る。埋土は、上層から褐灰色土、自然流木を多く含む黒色泥炭層、一部砂層を含む。なお黒色泥炭層の下層から、松河戸火山灰の層が確認できた。褐灰色土からは鎌倉時代の椀が、谷の中程部分黒色泥炭層の上層からは弥生時代末から古墳時代初頭の台付甕・高杯などが集中して出土した。

N R02（南側谷）は98C区に続き、埋土は上層が灰黄褐色粘質土、下層が黒色泥炭層で一部砂層を含む。上層から鎌倉時代の椀が、また谷の斜面より蔵骨器に使用された古瀬戸前期の瓶子が流れ込んだ状態で出土した。

馬の背状になった部分からは南北に横切る溝、斜面に添って縁辺部を巡る溝、柱穴を検出した。南北に横切る溝S D01・02からは椀、皿、水注、陶丸など鎌倉時代の遺物がまともって出土したが他の溝から遺物の出土はない。溝の埋土は褐色土と灰黄褐色土にわけられるが両者に時期差は認められなかった。柱穴の埋土も溝と同様で、褐色土と灰黄褐色土があり、P11より古瀬戸中期の小壺と陶丸が出土した。（川添和暁）

C区の概要 C区は西側を97C区に接し、北側を本年度の98B区に接している。調査区南半部は丘陵斜面で北側と西側は谷となる。調査区の北側はB区の延長で、馬の背状になった部分の南側の一部が続き、谷もN R02の続きである。調査区南西端には別の谷N R03があり、97C区のN R01と98C区中央のN R02に続くものと思われる。南側の丘陵斜面からは柱穴と溝を検出した。

N R02は98B区からの全長約55m、谷の最深部の幅約10mを測る。埋土は98B区と同様で、上層より灰黄褐色粘質土、黒色泥炭層、青灰色粘質土となり、一部で黒色泥炭層の下から極粗粒砂の砂層の堆積が認められた。灰黄褐色粘質土からは鎌倉時代の椀・皿が黒色泥炭層下の砂層からは弥生時代末から古墳時代初頭の台付甕が、谷底付近の青灰色粘質土からはチャート製の搔器が出土した。

N R03は97C区南側のN R01池の一部と思われ、埋土は基本的にはN R02と同様で概して礫が多い。灰黄褐色粘質土より「宝」と書かれた鎌倉時代の墨書椀が出土している。

まとめ 平成8年度より始まった上品野遺跡の調査は本年度の98C区の調査ではほぼ終了した。今年度の調査では、昨年度の97A区で検出した旧石器時代の台形様石器を含む石器集中地点の東限を98A区内で確認でき、ナイフ形石器と石刃、剥片などが新たに出土した。石器集中地点からは、台形様石器、ナイフ形石器、搔器、石刃、局部磨製石器といった製品と剥片も200点程出土している。剥片は横長剥片が多く今後石器制作過程が解明できるものと思われる。また97A区石器集中地点の西側面の土層による火山灰分析の結果、石器包含層の上層からはA T火山灰を、下層からはK-T Z火山灰およびD N P火山灰が確認された。

（小澤一弘）